

(別紙様式 = 中学校用)

都道府県番号	47
都道府県名	沖縄県

【
*重点をおいた観点にチェックすること

学校名及び規模

学校名	読谷村立読谷中学校					
学 年	1 年	2 年	3 年	特殊学級	計	教員数
学級数	8	8	7	1	24	49
生徒数	286	284	269	6	845	

研究の概要

(1) 研究主題

少人数指導を取り入れた授業の工夫と実践
- 個に応じた学習指導及び指導形態について -

(2) 研究主題設定の趣旨

数学においては学習面における理解度・習熟度の個人差が課題である。そのため、放課後や夏期休業中に補習指導を実施し取り組んできた。基礎学力の向上を図るためには、少人数により、基礎・基本の定着を図り、授業形態を工夫し、きめ細かな指導を行うことが不可欠である。また、生徒の個性を育てていくためにも、できるだけ多くの教員が生徒の発達を見守り、支援していくことがきわめて効果的である。このように、多様な学習集団の編成は、きめ細かな指導による学習集団の編成、きめ細かな指導による基礎学力の向上と相まって生徒指導上の課題にも大きな効果が期待できるものと考えられる。また、きめ細かな指導、個に応じた指導を効果的に進めて行くには、評価を工夫し生徒個々の習熟の程度を適切に判断し、指導に生かしていくことが効果的に指導を進めて行くためには必要である。

研究の概要(選択した観点を中心に記述すること)

(1) 研究推進体制の工夫

2つの学級を3つの学習集団、又は1つの学級を2つの学習集団に分かれて、子供の実態に合わせた指導計画で授業をそれぞれ進める。但し、単元のスタートを合わせるようにし、絶えず情報交換を図る。

基礎コース(10人程度).....基礎的・基本的事項の確実な定着を全体目標とし、生徒・学級の実態に合わせたきめ細かい少人数指導

標準・発展コース(30人程度)...基礎的・基本的事項の定着を最低目標とし、課題に応じて発展的な応用問題を行う。

コース選択は、生徒の希望を尊重し面談を通して行う。
コース別学級編成前にはレディネステスト等の予備調査を行い、基礎的・基本的事項の習熟の程度の把握を行う。予備調査は各章始めに行う。
コース選択は、生徒の希望を尊重して指導する。

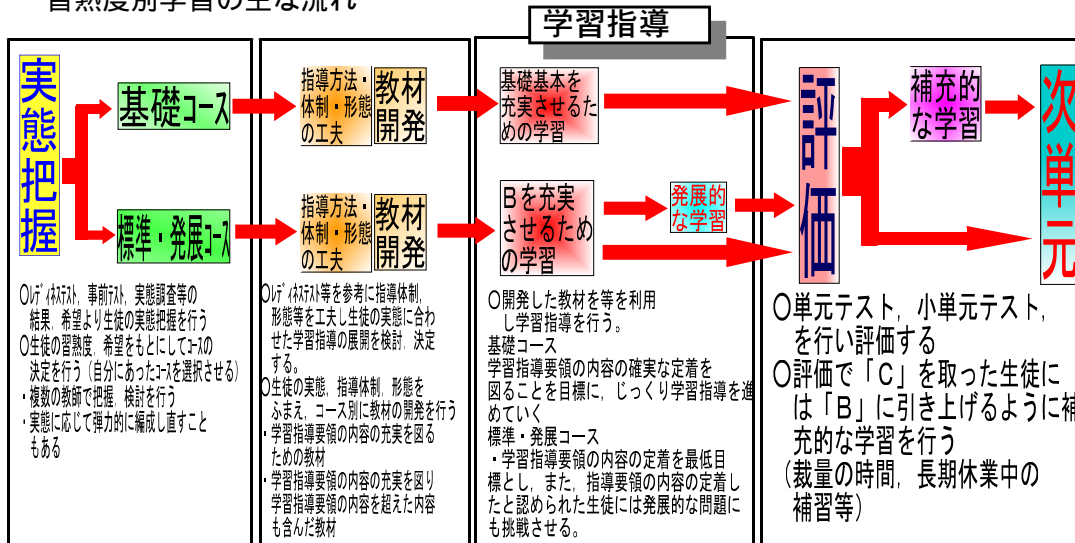
(2) 研究の実際

実施目標

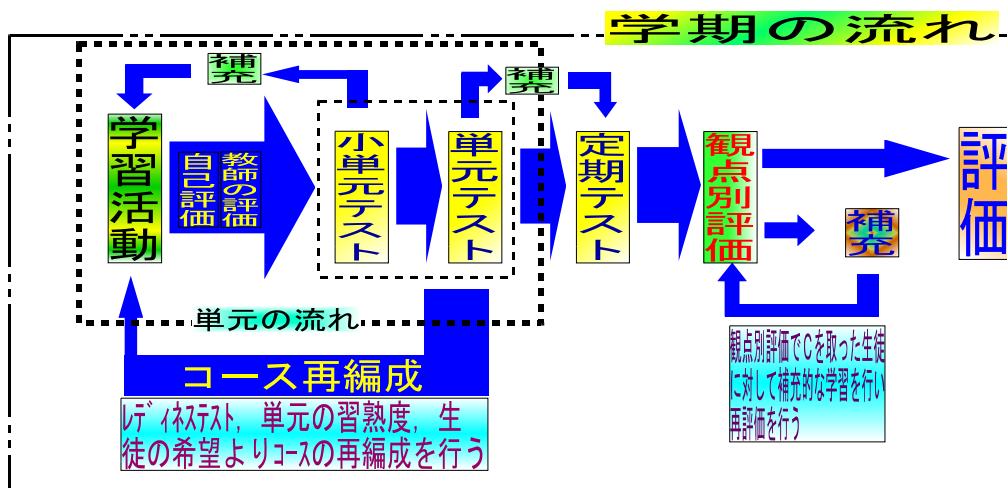
スタートを完全実施し、全ての生徒が基礎的・基本的学習事項の確実な定着を図る。
基礎クラスの達成度テストは全ての生徒が30点以上の基礎学力の定着標準・発展クラスでは年間を通して発展的な課題に取り組む。
目標に準拠した評価方法を確実にを行い、生徒の学習意欲の喚起を図る工夫を行う。

補習授業・個別指導・再テストなどの要望に応じた柔軟な教材対応する。
各コースの特性を生かした授業の工夫・教材・教員の開発を行う。

習熟度別学習の主な流れ



評価の流れと習熟度への活用



(3) 研究の成果と課題

成果

小単元で評価を行い「C」を取った生徒に対し補充的な学習を行ったことで「C」を「B」に引き上げることができ, 達成率も少しではあるが上昇した。

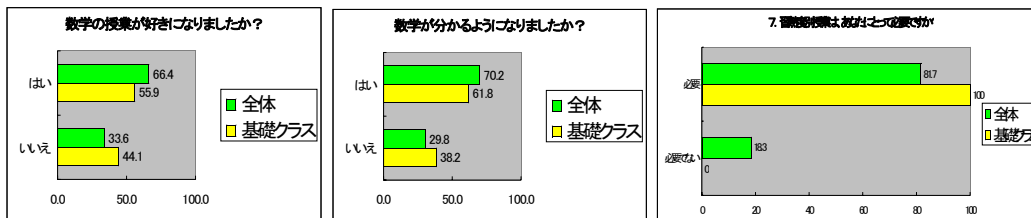
例 単元 一次関数

小単元別達成率(平均)の変化表(目標: 平均80%)

内容(小単元)	指導前	指導後	内容(小単元)	指導前	指導後
一次関数	66%	68%	一次関数と方程式	48%	53%
値の変化	32%	38%	一次関数の利用	47%	55%
グラフ	68%	70%	単元全体	59%	61%
グラフ	76%	76%			
グラフと変域	55%	61%			
一次関数を求める	48%	54%			

単元や, 小単元で評価を行うことにより, 生徒の習熟の程度を把握し, 補充的な学習を実践することで, 個に応じたきめ細かい指導を実践することができた。評価についての研修を行ったことにより, 評価についての共通理解を図ることができ評価を生かした指導を実践することができた。

習熟度別少人数授業を展開し、基礎・基本の定着、発展的な学習指導を行うことのできた。
 生徒の内面的な変容を見るために行った生徒へのアンケートの結果より、前より数学が好きになりましたか？という問いに60%の生徒が好きになったと答えている。また、前より分かるようになりましたか？という問いにも60%以上の生徒がはいと答えた。習熟度別授業は必要ですか？という問いに基礎コースの生徒は100%の生徒がはいと答えていることから、生徒の実態に合わせた授業が柔軟に実践できる習熟度別少人数授業は、底辺の生徒への目が行き届くため、普通授業に比べて授業参加がしやすくなったと考えられる。



課題

教科を受け持つ教師の数が増えたために教科の話し合いの時間を時間割の中に確保するのが難しかった。
 クラス編成の際に、数学に対して劣等感を持つ生徒が、学習意欲を更に減退させないような声かけが必要である。
 習熟度で分ける際の習熟の程度の評価の仕方の研究
 生徒の希望を優先しているが、特別教室の都合上、基礎クラスの人数を増やすのが難しい。
 習熟で分けた際、更に個別に指導が必要な生徒への対応

(4) 研究成果の普及の方策

学校独自の学力向上フロンティアスクール実践発表報告会での実践発表
 普及のためのホームページへの登載
 報告書の作成及び、報告書の配布

(5) その他(小・中連携の取組)

ねらい

継続的に、児童・生徒の「基礎学力」の向上を図る。
 相互の連携を促進し、接続の円滑化を図ることにより、児童・生徒個々の学習状況や子供の理解と指導の継続性を高める。
 小・中・相互の「指導方法の工夫・改善充実」を図る。
 異校種教諭の専門性を生かした指導方法改善に対する指導・助言・支援を取り入れることにより、授業や指導方法の工夫・改善と、教師の資質・指導力の向上に寄与する。
 校種間交流で児童・生徒の「夢や希望・目的意識」を高める。
 中学校教諭との交流で、中学校生活に対する「夢や希望」を育み、不安の軽減・接続の円滑化を図るなど、「持ち上がり制」等の効果も期待する。

具体的な取組

個に応じた指導方法の工夫を算数・数学を中心に研究を深める。
 小・中連携による教材開発(発展的・補充的学習)やTT, 少人数による授業連携を図り、確かな学力の定着を図る。
 小学校と連携し、積極的にコミュニケーションを図ることにより、中学校生活へのスムーズな移行を図る。

第6学年での、小・中連携の授業実践

教科・単元 算数科「分数の足し算引き算」
 指導方法改善等 習熟度別3学習集団編成(中学校教諭・担任・加配)
 小・中連携内容 読谷中学校数学科全教諭参画での研究授業企画・指導案作成
 1単元11時間を中学校数学科教諭2人が交代で継続指導

平成15年度の成果と課題

成果

専門性や多視点での、指導方法の工夫・改善充実が進んだ。
 児童の興味関心が高まり、学習意欲が向上した。
 児童の中学校進学に対する意識が変わり、不安感が減少した。
 小中連携の実践が他校へ普及しつつある。

課題
週時程や行事の違いで授業計画通りに進めていくのが難しい。
次年度計画段階での両校の摺り合わせが必要。

今後の展望
算数・数学以外の教科においても連携の幅を広げていく。
道徳・特活等での生徒・教師の連携を図る。
「総合的な学習の時間」の中での連携を図る

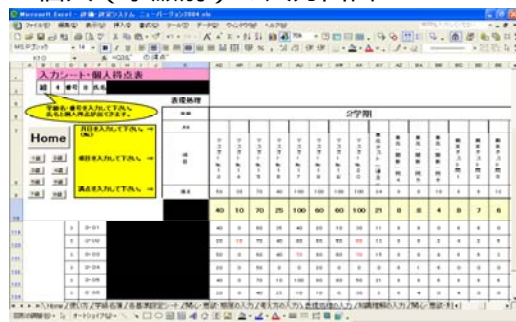
次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

- 【新規校・継続校】 15年度からの新規校 14年度からの継続校
- 【学校規模】 3学級以下 4～6学級
 7～9学級 10～12学級
 13～15学級 16学級以上
- 【指導体制】 少人数指導 T・Tによる指導
 その他
- 【研究教科】 国語 社会 数学 理科
 外国語 音楽 美術 技術・家庭
 保健体育 その他
- 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 有 無

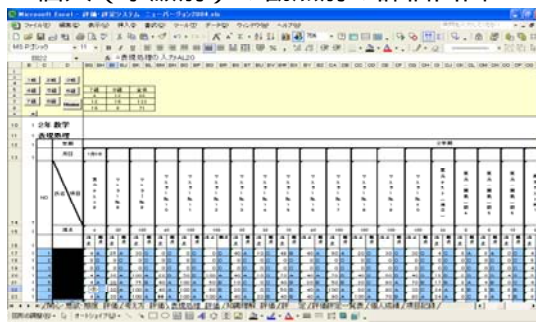
【特色ある取組事例として紹介したいポイント】

E X C E L で作成した評価ソフトを活用(客観的な評価のため)

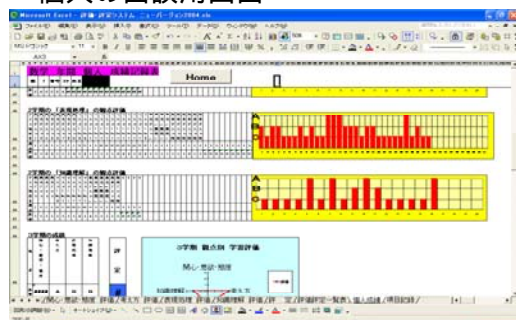
1, 観点別の得点,(小単元・単元・定期テスト)を入力する。
個人(学級別)の入力画面



2, 入力すると観点別の評価が表示される。
個人(学級別)の観点別の評価画面



3, 観点別の評価で「C」を取った生徒に対して補充的な指導を行う。その際には教科面談を行い,生徒に評価の状況を知らせる。
(面談は基本的に全生徒対象)
個人の面談用画面



4, 指導を行った後,再テスト等を実施し,評価を行う。